

複雑に絡み合った毛糸のほどき方を、2人が考えている。でも、どこから解くかですらもめて、長い間進展をみていない。

そこで、毛糸をほどくのに使うテーブルを作りましょう、と日本が提案する。作業部屋を提供し、関係者を集める。同じ場所で協力して作業を進めるうちに、信頼関係が醸成されていく。

中東和平の話だ。米国仲介の交渉は2014年に決裂したままだ。そんな中、イスラエルが占領するヨルダン川西岸パレスチナ自治区に建設された「農産加工団地」が昨年11月に操業を開始した。日本主導でイスラエル、パレスチナ自治政府、ヨルダンが協力する事業。パレスチナ経済の安定化を図り、和平を側面支援する狙いがある。

その4者閣僚級会合が開かれた。14年の決裂以来、イスラエル、パレスチナ双方が他国の仲介で直接協議に応じた例はないという。地元メディアは、両閣僚が「2度も握手した」と報じていた。

当地の日本人外交官は会合の意義を「座敷の提供」と言い表した。4者の直接会談や共同作業の場を設け、和平への道を周辺整備していくという発想。今回の会合では「高い政治レベルでの会合を開催する重要性」でも一致した。首脳会談を目指すという趣旨だ。ハネグビ・イスラエル首相府担当相は取材に「雰囲気は良かった。首脳会談の可能性は高まるかもしれない」と前向きだった。

これまで、米国がトップダウンで両首脳をテーブルにつかせたが交渉は進まなかった。パレスチナへの経済支援は治安の安定化につながり、イスラエルも支持する。誰も反対しない共同作業を設定し、現場から信頼の土台を積み上げていく。日本ならではの手法に期待したい。